

齊藤 日出治 著

『空間批判と対抗社会—グローバル時代の歴史認識—』を読む

稚内北星学園大学教授 佐々木 政憲

Masanori SASAKI

私たちはいま、グローバリゼーションの時代を生きている。それは1970年代におけるフォード主義の危機とともに顕在化し、80年代における社会主義国家の崩壊とともに加速した潮流である。この潮流のなかで、国民国家の庇護の下にあった市場経済が国民国家に牙をむき、東西も南北も「市場と国家」という対立の構図に飲み込まれていった。この対立軸の中で、「国民」をアイデンティティの基軸とする社会が揺らぎ、自立的個人とその市民権を前提とした近代的社会形成の原理も揺さぶりをかけられた。「社会的なもの」の根拠が喪失し、人びとは奈落の淵に立たされている。それがポストモダンの現在である。

本書は、このようなグローバリゼーションとポストモダンの歴史的状況にまっすぐに切り込む。だが、その切り込み方は極めて理論的である。近代社会を存立させてきた社会形成の基本的諸概念が著しく変容し、その再検討を迫られているからである。たとえば、「ナショナリズム」の概念。それはかつて民主主義や国民国家の共通感覚に支えられていた。しかし、ポストモダンとグローバリゼーションの歴史状況の中で、それは異質な他者の排除を正当化する権利根拠に転化している、と著者は指摘する。それゆえ、著者は社会形成の基礎的諸概念を現代的文脈の中で再検討し、この歴史状況に対抗する社会形成の概念へと脱構築しようとする。

この理論的な作業の中で、本書が最も核心に据える概念は「空間」概念である。そして、対抗的社会の構想は「空間の政治」として提起される。

本書は次のような構成になっている。

序 章 ポストモダンにおける歴史の復権

—歴史認識をめぐる政治闘争—

第一部 グローバル時代を読む—日常性、ジェンダー、市民権、都市文明—

第二部 空間の政治

第三部 ポストモダンへの対抗的社会像

第一部では、グローバリゼーションの時代における国民国家、ジェンダー、市民権、都市文明の変容が検討され、この作業を通じてポストナショナルな社会形成の方向性が探られる。ここでの中心的な論点は、近代的な市民権概念の再審とポストナショナルな市民権の提起である。グローバリゼーションは「市場と国家」の構図を前面に押し出し、「社会的なもの」の根拠を揺るがすと同時に、冒頭のナショナリズム概念で触れたように、国民国家と結びついていた人権や市民権を著しく変容させた。しかし、それはまた「人権と国家」というテーマを前面に押し出し、国際人権レジームを発展させた。そして、新たな人権と市民権概念が浮上した。そのひとつが「集团的成員権」という概念である。ひとは国民国家の成員である前に、特定の人種・言語・宗教・性の集団の成員であり、そのような複合的アイデンティティを生きる人間としての市民権の承認を求める権利が集团的成員権である。だが、これは国民国家の一方的な否定ではなく、人権を深化し拡張するものとして提起される。と同時に、この人権と市民権はグローバル資本主義に対してグローバルな環境保全や居住の権利としても提起される。著者のこの議論は、今日の国際人権論の最前線に立脚しつつ、グローバルな情報資本主義と都市文明の危機を克服する戦略として構想されている。それは著者自身が長年取り組んできた社会運動の経験を新たな社会形成の概念として普遍化する試みでもある。

他方、第三部では、ポストモダンの歴史状況が、ラディカルデモクラシーの理論を主たる参照基準にしつつ、批判的に検討される。そして、市民社会概念の批判的継承と社会主義の再定義を試みつつ、対抗的社会像が提起される。「市民社会と社会主義」は平田清明が冷戦下での現存社会主義に対して突きつけたテーマだが、著者はこのテーマを資本主義対資本主義のグローバル競争という30年後の歴史状況の中であらためて提起しなおす。

情報通信のネットワークを武器に展開するグローバル資本主義は、ヒト・モノ・カネ・情報の膨大なフローの空間を生み出している。そこでは資本の〈場所なき権力〉が社会空間を分断しつつ、人びとの住まう空間を〈権力なき場所〉として生産する一方で、人びとの意欲や行動をグローバルなフロー空間において統合しようとする。が、均質に見えるグローバル資本主義のフロー空間は様々な矛盾と葛藤に満ちている。とりわけ、固有の場所を生きるほかない人びとは自らの住まう場所を生きられる空間として再建しようとする。そこには閉鎖的な集団や国民への回帰の傾向も生まれるが、それを越えた新たな市民権も模索される。第一部でも紹介されているが、エコロジーに責任をもつエコロジー権、多様な社会諸集団が自らの文化を相互に承認しあう多文化市民権など、生きられる空間としてのフロー空間を求め

る「フローの市民権」である。著者は、社会主義をそのような新しい空間の生産と領有をめざす闘争として再定義する。そして、この「空間への権利」という問題を提起した先駆者こそアンリ・ルフェーブルである、と著者はいう。

さて、第二部である。本書の独自性は、グローバル時代の対抗的社会像が空間の政治経済学批判という作業を通じて提起されていることである。この作業はルフェーブルの空間論に依拠して進められる。

なぜ、空間なのか。ポスト・フォード主義における資本蓄積のダイナミズムの源泉がどこにあり、その根源的矛盾をどのように捉えるかという問題を開示するものこそ「空間」概念だからである。たとえば、著者はルフェーブルの最後の遺作『リズム分析の諸要因ーリズムの認識序説』から次の一節を引用している。

「資本主義は諸階級を、主人と奴隷を、富める者と貧しい者をつくったと言われている。それはまちがってはいないが、それだけでは資本の凄まじい威力を十分に推し量ることはできない。資本主義は、生活とその土台である身体や生きる時間の軽視のうえに出来上がっている。社会、文化、文明はそれらの軽視の上に構築されるのである」

著者は、これを次のように理解する。「資本は、生産過程で労働者の集合労働力を無償で領有するだけでなく、社会生活のすべての領域において生活者の生きられる経験を投資の対象とし、それをわがものとして領有する。ルフェーブルは、この生きられる経験の収奪こそが資本の生産力の最も強力な源泉だ主張するのである」

資本のダイナミズムの源泉にある「生きられる経験の収奪」の過程。この指摘は重要である。著者にとって自明なことだが、若干論点を補足しておこう。資本とは単なるモノではない。労働とその対象的条件の分離を基礎とした歴史的に独自の階級関係である。そして、そこに「主人と奴隷」の、「富める者と貧しい者」の文明化された階級差別が成立する。これがマルクスの見抜いたことである。

だが同時に、マルクスは、資本は単なる階級関係に解消されるのではない、とも言っている。資本とは「過程」である。それは生産と流通と消費の過程を包摂し、過去労働の成果を蓄積する循環＝蓄積の社会的過程である。この循環＝蓄積過程において、資本は物質的生産労働のみならず、その外に広がる「社会生活のすべての領域における生活者の生きられる経験」を包摂し、それらを価値増殖の資源としていく。そこに物質的富の生産と分配をめぐる階級関係だけではなく、それに規定されつつも相対的に自立した日常生活の広範な文化的政治的社会諸関係の秩序が形成されていく。その上で、ルフェーブルはこの生産と再生産の社会諸関係が現実にはどのような形をとるのかを問うのである。彼はそれを「空間」と捉える。

「社会諸関係が現実の存在をもつのは空間においてのみであり、空間を通じてのみである。社会関係の支持基盤は空間的なものである」。

こうして「空間の生産」という新しい問題圏が提起される。著者は、ルフェーブルが提起する三つの方法概念（「空間的实践」「空間の表象」「表象の空間」）を駆使しつつ、「空間の弁証法」を躍動感溢れる筆致で展開する。システム化が反システム運動を生み出すという単純な二項対立の弁証法ではない、ということが重要である。以下は、著者の議論の二番煎じに過ぎないが、筆者なりに紹介しておく。

私たちは時計の時間に合わせて日々の生活をおくる。そして、私生活の場や労働の場で産み、育て、休息し、生産労働に従事し、男や父親やサラリーマンとしてのアイデンティティを生きる。この生産と再生産の社会関係は住宅や工場、学校や病院、交通や通信網など、都市の現実の「知覚される空間」として存在する。それは生産と再生産の社会的諸関係を担う諸人格の「空間的实践」によって生産される。

とはいえ、この空間は行為事実に生産されるだけで、必ずしも論理的に首尾一貫したものではない。この「知覚される空間」が知的に練り上げられ、論理的に構想され、首尾一貫したものとなる時、そこに「思考された空間」が登場する。ルフェーブルは、それを「空間の表象」という。科学者や技術官僚が都市計画や経済計画として構想し、創造する社会空間である。それは都市工学や情報・通信工学などの「空間の科学」に裏づけられることによって社会の支配的な空間となると同時に、物質的富の生産に続く新たな投資の重層的な循環回路を通じて現実に生産される。

だが、生きられる身体が、経験的に知覚される身体や解剖学で提示される肉体と異なるように、「生きられる空間」は「知覚される空間」や「思考される空間」とは違う。生きられる空間は、分析的理性や経験的知性が切り捨てる多様な意味作用をとまなう社会的実践に満ちており、言語化されず、知覚もされない社会空間として無限に広がっている。それが「表象の諸空間」である。それは生きられる身体が欲望しつつ沈黙する闇の空間であり、知覚される身体が自己の多様性を汲み上げる無限の宝庫である。それゆえ、この生きられる身体と空間を「知覚される空間」として再開発し、科学技術の裏づけをもった「思考される空間」として区画整備し、成長経済の資源として包摂することが、資本蓄積の最も重要な戦略となる。

資本主義のダイナミズムの源泉はここにあり、そしてその根源的矛盾もここにある。これが、ルフェーブルの空間論から引き出す著者の論点のひとつである。つまり、「空間的实践」「空間の表象」「表象の空間」の節合によって生産される資本の空間は、その節合関係そのものの内に矛盾をはらみ、その脱節合をめざす対抗関係をも生み出す。そこに「空間の生産を

めぐるヘゲモニー闘争」が展開する。空間の科学によって「知覚される空間」を制御し、生きられる身体と社会的実践を価値増殖の資源に変換しようとする国家と資本の戦略に対して、生きられる身体感覚と欲求をそのような価値増殖の回路から解放し、生きられる空間を再建しようとする動きが出てくる。それは生産労働や理性が一方的に支配する空間ではなく、生命体としての人間の多面的要素がひとしく表現される空間であり、エコロジー、ジェンダー、エスニシティに関わる集団的権利が市民権として承認される空間である。著者はそれを「空間の政治」という。

最後に、現代の政治経済学を振り返って一言。レギュレーション理論は、20世紀資本主義のダイナミズムとその限界をフォード主義的發展様式として解き明かした。しかし、この理論には未だ政治哲学が欠けている。著者は、ルフェーブルに依拠しつつ、空間論という問題圏を開示することによって、この理論を越える政治経済学批判の地平を切り開いた。